

《原著論文》

読書行動を支える認知的メカニズム (Ⅱ)

——読書行動に関する尺度の検討——

Cognitive Mechanism Underlying Reading Behavior (Ⅱ) :
The development of scales for reading behavior

力久 由香里 諸井 克英*
(Yukari RIKIHISA) (Katsuhide MOROI)

Abstract : The purpose of the present study was to develop two kinds of scales to measure reading behavior. Two scales were constructed to measure reading behavior and motive for reading behavior. The scale items were based on items written by Hirayama (2004, 2005). Female undergraduates ($N = 201$) completed those scales. The principal component analyses (with promax rotations) of those scales yielded six components, respectively. According to the secondary component analyses, those components were divided into two categories : achievement and consumption. The significance of this research was discussed from the point of view of Deci's intrinsic motivation theory.

Key words : reading, motive, achievement, consumption.

I. 問題

前研究(力久・諸井, 2011)では, わが国における「読書離れ」の指摘に象徴される読書状況(毎日新聞社, 2011)を踏まえ, 読書行動を支える認知的メカニズムの枠組み構築の実証的試みが行われた。女子大学生を対象として書籍に対する接触パターンを抽出し, 帰属複雑性(Fletcher, Danilovics, Fernandez, Peterson, & Reeder, 1986)との関連が検討された。帰属複雑性とは, 出来事の原因を単純に考えるか複雑に考えるかについての個人差である。

書籍接触に関する主成分分析によって7主成分が得られ(「一般マンガ・コミック」, 「小説」, 「情報誌」, 「特殊マンガ・コミック」, 「実用書」, 「マニュアル」, 「人文書」), 2次主成分分析により物語性のある書籍と実生活

で直接役立つ書籍の2次主成分が抽出された。さらに, 共分散構造分析の結果は, 回答者の帰属複雑性における個人差が書籍に対する接触パターンに影響することを示した。

ところで, 前研究(力久・諸井, 2011)で試みた書籍接触傾向の測定は, 大手書店の書籍分類などを参考にして作成した63項目の分野の本や雑誌を6ヵ月間にどのくらい読んだかという設問に基づいている。つまり, 特定書籍に対する接触パターンから回答者の読書行動に関する個人的傾向を同定する方法を採用した。この場合, 嗜好される書籍分野から読書行動に関する個人的傾向の存在を間接的に推測することになる。

平山(2004)は, 読書に関する意識や行動をリッカート法に基づいて測定した。つまり, 読書に関する意識や行動を表す様々な短文項目を作成した。こちらの場合には, どのような書籍分野を嗜好しているかは不明であるが, 個人的傾向の特徴を一般的に同定できる。読書行動の基底にある認知的メカニズムの解明という観点からは

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生生活科学部

(力久・諸井, 2011), 帰属複雑性などの認知的な個人的傾性から書籍接触への影響を探るよりも, 読書に関する一般的な個人的傾性を媒介させたほうが明確な影響経路が検出できると思われる。そこで, 本研究の第1の目的として, 平山 (2004) の方法に基づき, 読書に関する意識・行動の基本的構造を探索する。ただし, 平山 (2004) の研究では, このような構造探索は行われていない。

また, 平山は, 続く研究で (平山, 2005), 読書動機を捉えるための尺度 (リッカート法) も作成した。この尺度を女子大学生に実施し, 因子分析によって4因子を抽出した (「娯楽休養〈読書本来の楽しみのため〉」, 「錬磨形成〈自分の人生を考え, 精神や思考の鍛錬〉」, 「言語技能〈読解力, 文章の書き方, 漢字の読み書きや言葉の表現力などの習得〉」, 「影響触発〈自分の周囲からの影響〉」)。本研究の第2の目的として, 平山 (2005) に従って読書動機の測定を行い, 読書動機の基本的構造の探索を試みる。

先述したように, 書籍接触パターンを検討した前研究 (力久・諸井, 2011) では, 物語性のある書籍と実生活で直接役立つ書籍への分離が認められた。仮説的であるが, 前者は読書自体に目的・価値を置く読書消費的行動, 後者は読書を通じた何らかの知識・技能の獲得が目的である達成的行動と考えられる。したがって, 本研究で測定する読書に関する意識・行動や読書動機がこれらの2側面に対応しているかも検討し, 意識・行動と動機との関連パターンも調べる。これが本研究の第3の目的である。

以上に述べた3つの研究目的のために, 女子大学生を対象とした質問紙調査を行った。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して, 質問紙調査を実施した (2011年6月27日)。回答にあたっては匿名性を保証し, 質問紙実施後に研究目的を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者 (25歳以上) を除き, 各尺度に完全回答した女子学生 201 名を分析対象とした (1年生 171 名, 2年生 14 名, 3年生 14 名, 4年生 2 名)。回答者の平均年齢は 18.56 歳 ($SD = .89$, 18~22 歳) であった。

質問紙の構成

質問紙は, 回答者の基本属性に加え, ①読書に関する

意識・行動尺度, ②読書動機尺度, ③認知的傾性に関する尺度 (帰属複雑性尺度, クリティカル・シンキング尺度) から構成されている。ただし, 本研究では, ①と②に関する分析結果のみを報告する。

(1) 読書に関する意識・行動尺度

回答者の日ごろの読書に関する意識や行動傾向を測定するために, 平山 (2004) の尺度項目を基に, 新たに 51 項目から成る尺度を作成した。本研究では, この尺度を読書に関する意識・行動尺度と呼ぶ。平山 (2004) が用いた項目には, ①読書自体を扱っていない項目や (たとえば, 「ゆったりとした時間が好きである」, 「時間があれば, もっとインターネットに使いたい」など), ②現在の自分とは関係のない項目 (「自分の家族は本をよく読んでいる」, 「高校生時代はよく本を読んでいた」など) が含まれている。これらの項目を削除し最終的に 51 項目を設定した (Table 1-a, Appendix 1-a 参照)。この6ヵ月間の回答者自身の生活を思い浮かべてもらい, 各項目に表されている事柄にどのくらいあてはまるかを4点尺度で評定させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

(2) 読書動機尺度

読書に関する動機を測定するために, 平山 (2005) が作成した尺度を利用した。平山は, ①大学生を対象とした面接や自由記述調査に加え, ②学習動機モデルの読書への適用に基づき, 読書動機に関する 67 項目尺度を作成した。本研究では, この 67 項目の表現を若干修正し利用した (Table 1-b, Appendix 1-b)。意識・行動尺度と同様に, この6ヵ月間の回答者自身の生活を思い浮かべさせ, 各項目に表されている読書動機が自分にどのくらいあてはまるかを4点尺度で評定させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお, 2つの尺度ともに, 回答にあたって, 「雑誌」, 「マンガ」や, 「授業で用いる教科書」を除くように指示した。また, 評定順の効果を相殺するために, 意識・行動尺度 (5 頁) と読書動機尺度 (7 頁) それぞれでは, 評定用紙をそれぞれ頁単位でランダムに並び替えた。

III. 結果

尺度の検討

(1) 項目水準の検討

2つの尺度について, 以下の手順で主成分分析を行った。すべての項目について平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックを行い, 不適切な

読書行動を支える認知的メカニズム（Ⅱ）

Table 1-a 読書に関する意識と行動尺度に関する主成分分析（プロマックス回転）（ $k=3$ ）の結果一回転後の主成分負荷量－

		当該主成分負荷量	当該主成分負荷量						
〔Ⅰ. 読書習慣〕			〔Ⅳ. 読書負担の軽減〕						
read_a_1	自分は本をよく読む方だ。	.89	read_c_6	文字が大きめな本ならもっと本を読みたい。	.75				
read_a_2	自分の読書量は十分だと思う。	.79	read_e_6	漢字にふりがながついていればもっと読書したい。	.65				
read_b_10	外出するときは、本を持って行く方だ。	.78	read_d_4	解説がていねいについていればもっと読書したい。	.54				
read_b_4	自分にとって読書は趣味のひとつと言える。	.78	read_e_2	軽くて薄い本ならもっと本を読みたい。	.52				
read_b_8	自分にとって読書は生活習慣のひとつと言える。	.77	read_a_9	読書には暗いイメージや印象がある。	.49				
read_d_3	読書の魅力は現実の生活から離れることにある。	.60	read_c_4	読書には読書仲間が必要だと思う。	.45				
read_d_1	好きな作家の本をほぼ全部読んだことがある。	.54	read_b_7	本は、必要なところだけ読む方だ。	.44				
read_e_11	本に熱中して時間を忘れた経験がある。	.49	〔Ⅴ. 教養の獲得〕						
read_c_1	ぶらりと本屋に行くことがある。	.44	read_e_3	読書の魅力は教養や知性をつけることにある。	.69				
read_c_7	読書の魅力は退屈な時間をなくすことにある。	.42	read_d_5	読書の魅力は考える力や論理力をつけることにある。	.65				
〔Ⅱ. 知的能力の向上〕			read_d_9	読書の魅力は情報を得ることにある。	.64				
read_e_5	本をたくさん読んでいる人は頭が良いと思う。	.76	read_e_4	読んで面白かった本は、その後何回も読み直す方だ。	.51				
read_e_9	大学で学ぶ上で、読書は必要不可欠だと思う。	.70	read_a_8	本を乱暴に扱う人に抵抗感がある。	.41				
read_c_9	本を読む人を尊敬している。	.66	〔Ⅵ. 有形財産としての書物〕						
read_d_8	大学生の学力低下の原因は読書離れにあると思う。	.60	read_a_3	自分の本を売ることに抵抗感がある。	.77				
read_c_3	読書をしないと将来のマイナスになると思う。	.56	read_a_4	自分の本を捨てることに抵抗感がある。	.68				
read_d_2	大学生ならば必ず読んでおくべき本があると思う。	.50	read_a_7	自分は雑誌をよく読む方だ。	-.41				
〔Ⅲ. 読書耐性〕									
read_d_7	読書には忍耐力が必要だと思う。	.77							
read_c_2	読書には強い意志が必要だと思う。	.76							
read_c_8	読書には体力が必要だと思う。	.69							
read_b_9	読書には持続力が必要だと思う。	.52							
read_a_6	自分には本を紹介してくれる人が多い。	-.43							
				Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	
			〔主成分間相関〕	I	.07	-.25	.01	.06	.26
				Ⅱ		.16	.20	.25	.13
				Ⅲ			.23	.11	-.17
				Ⅳ				.12	-.16
				Ⅴ					-.02

N = 201

初期固有値>1.50；初期説明率 49.80%

項目を除去した。

読書に関する意識・行動尺度では、項目水準の検討で 10 項目が不適切であった（Appendix 1-a；3 項目 $m > 3.5$ （うち 2 項目 $SD < .60$ ）；6 項目 $m \approx 3.5$ ；1 項目 $m \approx 1.5$ ）。また、読書動機尺度の項目を検討すると、不適切な 3 項目が認められた（Appendix 1-b；1 項目 $m \approx 3.5$ ；2 項目 $m \approx 1.5$ ）。

(2) 主成分分析

項目水準で適切であった項目を対象として、尺度の主成分構造を同定するために、主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））を行った。主成分固有値 ≥ 1.00 を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量 |.40| を基準に妥当な主成分分解を同定した。①特定主成分の負荷量が十分に大きく（ $\geq |.40|$ ）、②他主成分への負荷が小さい（ $< |.40|$ ）という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを反復した。最終的には、各分析で回帰法によって主成分得点を算出し、これらの得点を後の分析で用いた。

①読書に関する意識・行動尺度

41 項目を対象に主成分分析を行ったところ、2～13 主

成分分解が可能であった。最終的に明確な主成分が抽出された 6 主成分分解を採用した（Table 1-a）。主成分負荷量が高い項目の内容から、それぞれ次のように命名した。「読書習慣」、「知的能力の向上」、「読書耐性」、「読書負担の軽減」、「教養の獲得」、「有形財産としての書物」。

②読書動機尺度

64 項目を対象とした主成分分析を実施した。算出可能であった 2～13 主成分分解のうち、明確な主成分負荷量パターンが得られた 6 主成分分解を採用した（Table 1-b）。主成分負荷量の高い項目の内容から、各主成分を以下のように名づけた。「情報収集・知識獲得」、「充実感の獲得」、「日本語能力の形成」、「癒やし」、「習慣性」、「他者への同調」。

(3) 2 次主成分分析

2 尺度それぞれで得られた主成分構造の高次構造を探索するために、尺度ごとに 2 次主成分分析（プロマックス回転（ $k=3$ ））を試みた。それぞれで明確な主成分負荷量パターンを示す 2 主成分分解が得られた（Table 2-a, 2-b）。2 尺度の結果は明確に対応していた。それぞれの第 I 主成分は、読書行動によって自分に役立つ何かを得られるという達成感獲得やその動機を表していた。ま

Table 1-b 読書動機尺度に関する主成分分析（プロマックス回転）〈k=3〉の結果一回転後の主成分負荷量－

当該主成分負荷量		当該主成分負荷量	
〔I. 情報収集・知識獲得〕		〔IV. 癒やし〕	
motive_a_6	自分の悩みの解決に役立てたいからだ。 .78	motive_e_7	悲しい時にいやされたいからだ。 .79
motive_b_7	社会のしくみや社会の動きに興味があるからだ。 .77	motive_f_7	嫌なことを忘れるためだ。 .74
motive_c_5	世界の状況や動きに興味があるからだ。 .75	motive_f_3	現実から逃避できるからだ。 .68
motive_e_1	自分自身についてあれこれ考えを深めるためだ。 .72	motive_f_8	読書で疑似体験ができるからだ。 .59
motive_d_3	人の生き方や人生に興味があるからだ。 .71	motive_d_10	登場人物に感情移入したいからだ。 .55
motive_a_7	いろいろな考え方を知るためだ。 .68	motive_e_8	心にゆとりを持つためだ。 .52
motive_a_1	いろいろな知識を得るためだ。 .68	motive_c_6	読み終わったあとに元気が出るからだ。 .44
motive_b_8	自分の知らないことを知りたいからだ。 .63	motive_b_4	一人で静かに過ごしたいからだ。 .44
motive_a_9	日本あるいは世界の歴史に興味があるからだ。 .58	〔V. 習慣性〕	
motive_e_3	視野を広げるためだ。 .58	motive_a_4	好きな作家がいるからだ。 .79
motive_c_3	人間として成長したいからだ。 .58	motive_g_7	読書が趣味であるからだ。 .74
motive_f_1	日常の問題解決に役立てるためだ。 .57	motive_c_4	本の世界が好きだからだ。 .66
motive_g_1	自分を見つめなおすためだ。 .55	motive_d_9	読書が習慣だからだ。 .61
motive_a_10	読んだことを将来の仕事に活かしたいからだ。 .54	motive_f_2	「活字」が好きだからだ。 .52
motive_e_2	一般常識をつけるためだ。 .49	motive_c_1	のんびりくつろぎたいからだ。 .46
〔II. 充実感の獲得〕		〔VI. 他者への同調〕	
motive_c_10	読み終わったあとに満足感があるからだ。 .77	motive_d_5	（その本が）世間で評判になっているからだ。 .86
motive_a_8	読み終わったあとに充実感があるからだ。 .73	motive_f_4	（その本が）話題になっているからだ。 .80
motive_d_6	読み終わったあとに達成感があるからだ。 .71	motive_d_4	（その本が）映画やドラマの原作だからだ。 .79
motive_b_9	あれこれと想像することが好きだからだ。 .61	motive_a_5	（その本が）友だちの間に話題になっているからだ。 .77
motive_b_3	感動したいからだ。 .61	motive_g_6	名作と言われるものを読んでみたいからだ。 .48
motive_d_1	読書を楽しみたいからだ。 .54		
motive_b_6	心を豊かにするためだ。 .53		
motive_g_3	面白い話が知りたいからだ。 .51		
motive_g_4	本から良い影響を受けたいからだ。 .43		
〔III. 日本語能力の形成〕			
motive_f_6	読解力をつけるためだ。 .83		
motive_d_2	頭の訓練のためだ。 .70		
motive_f_9	語い（ボキャブラリー）を豊かにするためだ。 .69		
motive_e_9	文章の書き方を学ぶためだ。 .69		
motive_e_10	物知りになりたいからだ。 .62		
motive_c_9	集中力がつくからだ。 .61		
motive_b_5	漢字の読み書きに強くなりたいからだ。 .57		
motive_c_8	読書をするとう頭がさえるからだ。 .49		
motive_a_3	言葉の表現力がつくからだ。 .48		

	II	III	IV	V	VI
〔主成分間相関〕	I .39	.54	.26	.13	.15
	II	.36	.30	.29	.07
	III		.23	.13	.17
	IV			.34	.14
	V				.09

N = 201

初期固有値 > 1.99；初期説明率 59.56%

Table 2-a 読書に関する意識と行動尺度に関する 2 次主成分分析（プロマックス回転）〈k=3〉の結果一回転後の主成分負荷量－

	I	II
II. 知的能力の向上	.75	.20
V. 教養の獲得	.64	.09
IV. 読書負担の軽減	.57	-.27
I. 読書習慣	.15	.73
VI. 有形財産としての書物	.05	.72
III. 読書耐性	.43	-.57
〔主成分間相関〕		-.04

N = 201

初期固有値 > 1.405；初期説明率 50.06%

Table 2-b 読書動機尺度に関する 2 次主成分分析（プロマックス回転）〈k=3〉の結果一回転後の主成分負荷量－

	I	II
III. 日本語能力の形成	.86	-.07
I. 情報収集・知識獲得	.85	-.03
II. 充実感の獲得	.49	.39
VI. 他者への同調	.31	.07
V. 習慣性	-.12	.88
IV. 癒やし	.16	.70
〔主成分間相関〕		.26

N = 201

初期固有値 > 1.066；初期説明率 55.50%

Table 3-a 読書動機と読書に対する意識と行動—2
次主成分得点間のピアソン相関値—

	[読書に対する意識と行動]	
	第 I 主成分	第 II 主成分
[読書動機]		
第 I 主成分	.62 a	.16 c
第 II 主成分	.12	.51 a

N = 201

a: $p < .001$; c: $p < .05$ **Table 3-b** 2 尺度での主成分得点を対象とする高次
主成分分析 (プロマックス回転) ($k=3$)
の結果—回転後の主成分負荷量—

	I	II
[読書動機]		
III. 日本語能力の形成	.74	.12
I. 情報収集・知識獲得	.71	.20
VI. 他者への同調	.40	-.10
V. 習慣性	-.08	.82
II. 充実感の獲得	.34	.54
IV. 癒し	.23	.49
[読書に対する意識と行動]		
II. 知的能力の向上	.68	-.04
IV. 読書負担の軽減	.55	-.16
V. 教養の獲得	.53	.05
I. 読書習慣	-.04	.88
III. 読書耐性	.48	-.51
VI. 有形財産としての書物	-.11	.47
[主成分間相関]		.19

N = 201

初期固有値 > 2.12 ; 初期説明率 43.74%

た、第 II 主成分は、読書による心理・社会的成果よりも読書行動の消費目的化に関わっていた。

読書動機と読書に関する意識・行動との関係

読書動機と読書に関する意識・行動の関係を検討するために、次のような分析を行った。まず、先の 2 次主成分分析で得られた主成分得点間のピアソン相関値を求めたところ (Table 3-a)、第 I 主成分、第 II 主成分同士で有意な高い相関値が得られた。これは、読書に関する動機と意識・行動を関係づける達成的側面 (第 I 主成分それぞれ) と消費的側面 (第 II 主成分それぞれ) の存在を表している。

さらに、全体としてこのことを確認するために、動機 6 主成分得点と意識・行動 6 主成分得点を対象とした主成分分析 (プロマックス回転 ($k=3$)) を試みた (Table 3-b)。第 I 主成分は読書の達成的側面を表し、第 II 主

成分は習慣的側面を示している。2 主成分それぞれに対する負荷の高さを見ると、先述した 2 次主成分分析でのパターンと次の 2 点が異なる。①動機での「充実感の獲得」の習慣的側面が強調された、②意識・行動での「読書耐性」がもつ達成的側面と習慣的側面の 2 面性がより顕著となる。

IV. 考察

本研究は、3 つの目的のために行われた。①読書に関する意識・行動の基本的構造の探索、②読書動機の基本的構造の探索、③意識・行動と読書動機の消費的側面と達成的側面の同定。

平井 (2004) が作成した尺度項目に基づき作成した読書に関する意識・行動尺度に関する 1 次主成分分析により 6 主成分が抽出された。2 次主成分分析の結果は、i) 「知的能力の向上」、「教養の獲得」、および「読書負担の軽減」と、ii) 「読書習慣」、「有形財産としての書物」、および「読書耐性」の 2 つに大別されることを示唆した。また、平井 (2005) の尺度によった読書動機尺度の分析結果も、i) 「日本語能力の形成」、「情報収集・知識獲得」、「充実感の獲得」、および「他者への同調」と、ii) 「習慣性」および「癒やし」に大別された。

これらは、動機の水準であれ、意識・行動の水準であれ、①読書を通じた何からの知識・技能の獲得が目的である達成的側面と、②読書自体に目的・価値を置く消費的側面に分離できるという予測と一致する。さらに、相関分析 (Table 3-a) や意識・行動と動機を一括した高次主成分分析 (Table 3-b) の結果、これら 2 側面それぞれが動機と意識・行動で連結していることを示した。

本研究の結果によれば、読書が達成的側面と消費的側面の 2 経路によって基本的に支えられていることになる。これは、Deci (1975) が問題にした外発的動機と内発的動機の認知に対応するだろう。「読書離れ」に対する処方箋が国語教育と連結した効果の強調 (Deci に従えば読書行動の外発的動機づけ) にも依存することは誤りかもしれない。つまり、それは読書の基底にある達成的側面の活性化のみを意図しているといえ、読書のいわば一過的な娯楽的側面である消費性も喚起する必要がある。

ところで、本研究は平山 (2004, 2005) の研究に依拠したが、同様な試みをした他の研究もある。たとえば、吉田・川島 (2004) は、自由記述調査に基づき、読書に対する意欲、意義や、活動などに関する 108 項目を作成

した。因子分析を用いて 10 因子を抽出し、下位尺度の構成を試みた（「読書ポジティブ」、「読書ネガティブ」、「感情移入」、「学習価値」、「ふれあい重視」、「感動・感化」、「絵本好き」、「読書環境」、「想像力・好奇心」、「メディア・イメージ」）。しかし、信頼性（ α 係数）が低い下位尺度があり、尺度構成上の問題がある。

また、松尾（2011）は、読書の効果性認知を測る尺度を測定し、男女中学生に実施した。因子分析により 3 因子が抽出された（「同一視」、「洞察」、「感情の発散と安定」）。これら 3 側面は高い自己意識と正の関係があった。

本研究では、先に触れたように認知的傾性に関する尺度も同時に測定している。今後、これらの結果も含めた分析を行った上で、読書の 2 側面に関して Deci（1975）の内発的動機づけ理論などと関連づけながら、さらに精緻な研究を行う必要がある。

〈付記〉

(1) 本研究は、第 1 著者の力久由香里（生活科学研究科生活デザイン専攻 2 年）が第 2 著者の下で修士論文のために立案・収集したデータに基づいている。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 20.0.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic motivation*. Plenum Press. 安藤延男・石田梅男（訳）『内発的動機づけ－実験社会心理学的アプローチ－』1980 誠信書房
- Fletcher, G. J. O., Danilovics, P., Fernandez, G., Peterson, D., & Reeder, G. D. 1986 Attributional Complexity: An individual differences measure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 875–884.
- 平山祐一郎 2004 大学生の読書量の分析 東京家政大学研究紀要, **44**(1), 117–125.
- 平山祐一郎 2005 大学生の読書動機の分析 東京家政大学研究紀要, **45**(1), 117–122.
- 毎日新聞社 2011 『2011 年版読書世論調査－第 64 回読書世論調査／第 56 回学校読書調査－』毎日新聞社
- 松尾直博 2011 中学生の読書と自己意識の関係－読書療法の観点から－ 東京学芸大学紀要（総合教育科学系）, **62**(1), 205–213.
- 力久由香里・諸井克英 2011 読書行動を支える認知的メカニズム－帰属複雑性の役割－ 同志社女子大学生生活科学, **45**, 37–43.
- 吉田真弓・川島一夫 2004 読書への意欲と読書の意味づけ－読書量と読書に対する評価－ 信州大学教育学部紀要, **112**, 169–179.

（2012 年 11 月 9 日受理）

Appendix 1-a 読書に関する意識と行動尺度における残余項目

read_a_5	自分はマンガをよく読む方だ。	
read_a_10	今までにもっと本を読んでおけば良かったと思う。	≒ 3.5
read_b_1	本を読む習慣をつけることは必要だと思う。	≒ 3.5
read_b_2	授業などでもっと本を紹介して欲しい。	
read_b_3	読書には集中力が必要だと思う。	> 3.5
read_b_5	これからの時代も読書の重要性は高いと思う。	≒ 3.5
read_b_6	読書と勉学の関係は深いと思う。	≒ 3.5
read_c_5	テレビなどで面白い本をもっと紹介して欲しい。	
read_c_10	本は、なるべく最初から最後まで読みたい。	> 3.5 SD < .60
read_d_6	読書の魅力は感動が得られるところにある。	≒ 3.5
read_d_10	どんな本を読めばよいか相談できる人が欲しい。	
read_e_1	自分も年をとったらもっと本を読むだろう。	
read_e_7	今の時代、読書に熱中する人は少し変わっている。	≒ 1.5
read_e_8	読書は人生のどの時期でも大切なものだと思う。	> 3.5 SD < .60
read_e_10	時間があれば、もっと本を読みたい。	≒ 3.5

Appendix 1-b 読書動機尺度における残余項目

motive_a_2	気持ちを落ち着かせるためだ。	
motive_b_1	まわりから尊敬されたいからだ。	≒ 1.5
motive_b_2	レポートや試験のためだ。	
motive_b_10	本を読む以外とりあえずやることがないからだ。	≒ 1.5
motive_c_2	（その本が）自分の趣味に関連した本だからだ。	
motive_c_7	時間をむだにしたくないからだ。	
motive_d_7	物語を楽しむためだ。	≒ 3.5
motive_d_8	眠れないときがあるためだ。	
motive_e_4	好きな本のジャンルがあるからだ。	
motive_e_5	気分転換をするためだ。	
motive_e_6	何かを調べるためだ。	
motive_f_5	（その本が）自分の専門に関連しているからだ。	
motive_f_10	人から読むようにすすめられるからだ。	
motive_g_2	リラックスするためだ。	
motive_g_5	会話の材料（ネタ）になるからだ。	
